新旧会長挨拶

テールランプ

山﨑親雄

長きにわたって務めて参りました公益社団法人日本透析医会会長の職を辞することになりました．多くの皆様に支えられたからこそ，ここまで来ることができたと，心より感謝申し上げます．

辞職を考えるに至った理由は，以下の三つに集約されるかと思います．第一は，会長就任直後から後継者はこの人と決めており，ことあるごとに「後をお願いしますよ」とささやき続けてきた先生に，会長職をお引き受けいただくことができ，これを支える執行部や事務が充実したことです．二番目は，家族や自分自身の健康を含めた個人的な理由により，日常的に，気力に欠けたり，努力に憾みを残したりする場面が頻回に出てきたことによります．最後の理由は，私自身は医会設立当初の執行部の方々のやり方を踏襲した活動を展開してきたと考えていますが，今後の透析医療体制の維持のためには，改めてこの活動方法を見直す時期に来ており，私とは異なる能力が必要と判断したことによります．

ところで，私が日本透析医会に関与しようと思ったのは，診療報酬を含めた経済的・社会的背景こそが透析の質を向上させ，生命予後を改善し，透析施設の健全な発展を促すと考えたことによります．たとえば，診療報酬で裏付けられたROを用いた水処理加算の導入や透析時間区分の新設は，間違いなく透析患者の生命予後を改善してきましたし，他の分野より恵まれた診療報酬は，透析施設の医療の質を上げ続けてきました．診療所にすらMSWや栄養士が配属されたチーム医療は透析以外では稀有なことですし，現在，各地で地域医療を支えている民間病院の多くが，透析医療をベースに発展したといっても過言ではないでしょう．

さて，かつて，こうした透析医療体制が保障されてきた背景には，特定の医師が個人的な活動として，厚生労働省への診療報酬改定に関する意見や要望を行ってきたことがあります．日本透析医会の設立に大きな貢献を残した医師たちも，もともとはこうした活動を展開していました．しかし個人的な活動では限界があるため，透析医会を立ち上げ，最終的に社団法人として認可された後は，日本透析医会が，透析に関する診療報酬改定にさいしての，厚生労働省のカウンターパートになったと考えています．ただ方法は，たとえば当時の執行部の何人かは，保険局医療課に所属する技官の先輩であったり同級生であったりしたことから，この技官を窓口に，要望書を提出するというものでした．その後時代は変わり，医療課担当者と日本透析医会とは，担当者同士には個人的なつながりはないものの，お互いの立場を尊重し，お互いに尊敬と信頼の心をもって，時には透析施設にとって不利なデータも提供しつつ，正直に交渉にあたってきました．また問題点の指摘や要望内容については，いろいろな機会に会員からの要望を聞くことがあっても，最終的には会長を中心とする常任理事会でその大部分を決定し，事にあたってきました．特に，診療報酬改定の最終段階では，時間的な問題もあって，ほとんど会長の独断で事を処理したこともありました．また，こうした日

常的な意思決定の仕組みは，他の事業についても同様で，実質的には常任理事会までで意思決定され，実行されてきました．

さてそこで，退任理由の三番目に戻りますが，日本透析医会はここに示しましたように，なんとも日本的な方法で，しかしもっとも人間的な方法で，診療報酬改定をはじめとする事業を展開してきました．ただし，それらは会員の大多数の意思を尊重したものであったものか，疑問も残ります．まずは，診療報酬改定にさいして，すべて手の内をさらけ出しても，懐に飛び込んで交渉するという方法が正しかったものか，について考えてみる必要があります．また，日本透析医会の意思決定は，十分な説明と同意（インフォームドコンセント）を金科玉条とする近代的医療ではなく，時代遅れのパターナリズムそのものの医療に例えることができ，今少し，会員の意見を取り入れる仕組みを考え，民主的な運営が必要ではなかったか，について考えてみる必要もあります．こうした新しい日本透析医会の運営について，新しい会長を中心にした常任理事会・理事会や会員に考えてもらうこととし，退任します．

目の前に，透析患者数が減少し，通院不能な高齢者が溢れる時代が迫っています．個人的には，今しばらく，透析現場で，これらの問題に取り組んでいこうと思います．

「トワイライトエクスプレス」同様，テールランプをひきずって去ります．

本当に，長い間，楽しい立場を与えていただいてありがとうございました．